

サモア国立大学と長野県看護大学の
短期学生交換留学協定に基づく

2013（平成25）年度 国際看護実習

2011年 東日本大震災

**「東北被災地での災害看護演習」
報告書**



私たちが学んだこと、分かち合ったこと、心に決めたこと・・・

そして「伝えたい」と思う気持ちをまとめました。

長野県看護大学基礎看護学講座 国際看護実習

2013（平成 25）年度「国際看護実習」は、本学のみらい基金および
長野県看護大学後援会によるご支援をいただき、実施されました。
実施にあたり、準備から終了まで広くご理解とお力添えをいただきました
学内外の皆様に心より感謝申し上げます。

なお、災害看護演習におきましては、釜石市および大槌町の皆様のご協力なくしては実現しませんでした。
改めて御礼申し上げるとともに、皆様のご健康とご多幸をお祈りいたします。

サモア国立大学と長野県看護大学の短期交換留学協定に基づく

2013（平成 25）年度 国際看護実習

「東北被災地での災害看護演習」報告書

長野県看護大学基礎看護学講座 国際看護実習

発行：「国際看護実習」科目担当 宮越幸代

発行日：2014（平成 26）年 3月8日

引用・転載を希望される場合は、お手数ですがご一報ください。

miyakoshi-sachiyo@nagano-nurs.ac.jp

〒399-4117 長野県駒ヶ根市 1694 番地

長野県看護大学

電話（代）0265-81-5100

東日本大震災の地で留学生と共に考える災害看護

長野県看護大学基礎看護学講座「国際看護実習」科目担当 宮越幸代

平成 25 年度、サモア国立大学と本学の短期交換留学協定に基づく「国際看護実習」では、留学生 2 名と本学実習生の合計 5 名が、後半の 1 週間で東日本大震災の被災地である釜石市と大槌町での実習を行いました。大地震も津波も経験していない自分たちが、留学生を伴って被災地で何ができるのか、実習の成果は未知数どころか、かえって現地の方々を煩わせてしまうのでは？という不安を抱えた大いなる「挑戦」でした。

長野から東京へ、またそこから 7 時間余りの夜行バスに乗り継ぎ、釜石市に到着した直後から、コミュニティセンターで保健師からの講話、翌日は一日かけて医療機関、民間施設を訪問し、現地の「語り部」の方々から実際の体験をお聞きしました。旧大槌町役場跡で、仮設団地で、津波に寸断され錆びついたレールの上で・・・中には写真を示しつつ、私たちを見かけてその場で解説を申し出てくださいる方も複数いらっしゃいました。予定の時間を超えてもなお、あの日起こった事実を伝えようとするその姿にいつしか私たちの「何かをしたい」「何かをせねば」という気負いや、学生の緊張感は徐々に薄らいで、まずは「現地で事実に向き合う」経験の重みを噛みしめました。

体験と結びついて刻み込まれた災害時の看護職者の「冷静さ」

「通訳を介した説明で、留学生にそのすべてを理解してもらうのは大変難しい」ということは、わかっていました。とはいえ、サモアと日本の津波被害という共通の経験をもとに、彼らが被災地で感じたこと、考えたことを、今回はひとつでも多く共有し、本学の学生とともに心に刻み付けておくことが重要なのではないかと考えました。実際に留学生たちには、自分自身の事前の体験と結びついた話が最も心に刻み込まれたようでした。たとえば、県立大槌病院では、屋上に患者を避難させ 2 晩を過ごした看護師長の体験談の中から、不安を募らせる患者や仲間に、そして自分にも「大丈夫、大丈夫」と言い聞かせることで、冷静さを保ったというお話を聞きました。このエピソードについて留学生の一人は、2009 年にサモア沿岸を襲った大津波後に「自分が落ち着かなくてどうする」と、自分に言い聞かせつつ、周りにも「落ち着いて」と伝えることで、冷静に対処できた経験をすんなりと結び付け「実感として理解できた」と語りました。

地域を守る看護職、途上国や被災地で働く看護職をめざす学生たち

災害時の冷静な態度とともに、留学生らは「地域を津波から守る看護職の使命を実感した」と語りました。また、本学の実習生の一人も「『いずれは被災地で』と思ってきたが、それはやはり『今だ』と思った」と、この春からこの演習で訪問した釜石市に就職することを決めました。

本学では複数の既卒実習生が国際協力の道に進み、中には既に帰国して新たに今年から離島の医療に関わる者も出てきました。必ずしもそれらが 9 年間（2013 年度）の実績を持つ国際看護実習の成果とは言いきれませんが、両校がじっくりと積み上げてきた実習の経験は、国や地域を超えて人と人が支え合う力につながっているのではないかと、思うことがあります。

その他にも海辺で子どもたちの安全を見守る活動や、実習の最後の夜に皆で斉唱したサモアの美しいメロディー・・・険の向こうの数々の思い出から、同じく津波からの復興をめざす彼の国から私自身も大いなる力をもらったような気がしています。気負いを捨てて、現地の事実に向き合ったこの実習の経験が、学生たちの今後の人生や看護職としてのキャリアを支えていくことを心から祈っています。真夏のハードな実習スケジュールに引き続き、真夜中の高速バスに揺られ、初めての被災地訪問。この短期間の演習で学びとして確認できたことは、それほど多いとは言いきれませんが、「災害看護」を手掛かりに国を超えてどのような体験、学び、気づきがあったのか、是非、本冊子をじっくり手に取ってご覧いただけましたら幸いです。

最後に、現地で本演習を快く受け入れてくださいました皆様への御礼とともに、引き続き、東日本大震災の影響を受けた地域の皆様のご健康と復興をお祈りいたします。

平成 26 年 3 月 本学実習生の巣立ちを前に

目次

国際看護実習と災害看護演習の位置づけおよび目的	5
2013（平成 25）年度「国際看護実習」履修生およびスケジュール	6
各自が設定した独自の実習目標と達成状況の振り返り （長野県看護大学実習生の実習後レポートからの抜粋）	7 - 10
サモア国立大学留学生が学んだこと（実習後提出レポートからの抜粋）	11-12
「災害看護演習」実習成果報告会の概要と発表資料	
平成 25 年 10 月 25 日（金）信濃毎日新聞朝刊 掲載記事	13
平成 25 年 11 月 10 日（日）医療タイムス 掲載記事	14
報告会資料 - 「国際看護実習」科目担当 宮越幸代	Web 公開
報告会資料 - 飯嶋勇貴・伊東有紗子・宮澤江莉	では省略
《平成 25 年度卒業研究》「2013 年度国際看護実習から学んだ災害看護の普遍的な原則とサモアにおける災害看護の検討」要約 - 伊東有紗子	15
サモア国立大学および長野県看護大学間における交流事業 学生短期交換留学「国際看護実習」の概要	16
実習が終了し、卒業前に思うこと	本学国際看護実習履修生 17
国際看護実習を終えて	礎看護学講座 今井家子・宮越幸代 18
写真資料：駒ヶ根出発より成田空港からの留学生帰国まで 計 36 点 Web 公開では省略。本学 HP「2013 年度国際看護実習」よりご覧ください。 本学トップページ>>キャンパスライフ>>年間行事の様子 http://www.nagano-nurs.ac.jp/campus/20130808kokusai.htm	

*本報告書全体の内容の公表においては、すべて対象者の許可済みですが、本書の引用・転載の場合はご連絡ください。



国際看護実習と災害看護演習の位置づけおよび目的

2013（平成25）年度 国際看護実習（サモア国立大学看護学生受け入れ年度）

1. 実習目的

異文化的背景を持つ他国からの留学生と共同で保健医療福祉施設の視察や臨地実習を行い、互いの社会的背景や文化・習慣がどのように対象の理解や看護実践に影響を及ぼすのか、看護におけるお互いの国の特徴や普遍的な原則を知るとともに、国内外での看護実践に必要な国際的な看護の視点を養う。

2. 実習目標

- 1) サモア国立大学看護健康科学部の学生（以下、留学生）と互いの国の社会システムや文化を紹介し合い、それらがそれぞれの住民の暮らしや健康にどのような影響を与えているかを考察すると同時に、自国の文化や習慣への理解を深める。
- 2) 留学生と共同で保健医療福祉施設の視察や臨地実習を行い、サモアと日本で行われる看護の違いについて意見交換を行い、それらの特徴とそれぞれの違いが生じる背景を考察する。
- 3) 臨地実習での対象理解や看護アセスメントを通して、サモアと日本の看護学生が対象をとらえる視点や看護問題を抽出する過程の違いおよび共通点を理解する。
- 4) 臨地実習で共同した経験を元に、国や文化の違いを超えて普遍的に共通する看護の原則や効果的な国際的協働の方法について具体的に考察する。
- 5) 実習期間全般を通して、異文化の国で過ごす留学生とのよりよい連携と共同に努め、円滑なチームワークを行う。

「国際看護実習」における東日本大震災被災地での「災害看護演習」

1. 演習実施の背景と目的

世界でもアジア地域は統計上、世界で最も自然災害の発生件数および被害額において、トップレベルの位置づけにある。アジアの中でも先進的に発展を続けてきた我が国は、防災および発災後の災害対応においても先駆的な取り組みや他国へのリーダーシップを発揮する使命が期待され、近年、基礎看護教育課程においては災害看護教育が義務づけられた。

一方、途上国はインフラや社会的な基盤の脆弱さから、被災による社会的なダメージは先進国との比較にならない打撃をもたらす。南大洋州の中でも、本学が交流協定を結ぶサモア国立大学があるサモア独立国は、古くから津波やサイクロンなどの自然災害に見舞われ、防災および災害後の対策が課題となってきた。つまり、防災や発災時の対応の充実はもちろん、両国の学生が災害看護の実践力を身に着けることは、両国の看護教育に求められる重要な学習課題である。この演習では、サモア国立大学と本学の実習生が履修する国際看護実習を通して東北被災地を訪ね、その実際の視察や両国の学生に可能な活動を行う。さらに、その体験と思いについての意見交換を通して津波被災地で学んだことを共有し合い、国を超えて実践できる災害看護の普遍的な原則と同時に、それぞれの文化にふさわしい災害看護の具体的実践を考える機会とする。

2. 演習の方法

- 1) 訪問先の岩手県釜石市および大槌町における東日本大震災の記録資料を閲覧すると同時に、災害看護学担当教員より災害看護の原則と実際に関する講義を受け、震災の概要と被害の状況を理解する。
- 2) 岩手県大槌町で救援活動に携わった災害看護学担当教員および現地担当者による紹介に基づき、東日本大震災による津波被災地の視察や許可を得られた語り部（保健師および住民各1名）からの体験談の聴講を行う。また仮設住宅を訪ね、有志の住民らによる現状の暮らしについてのお話を聞く。
- 3) 紹介を受けた県立大槌病院での震災直後の対応に関する講話をお聞きし、被災直後の医療従事者の対応や災害看護の役割についての意見交換、仮設診療所内の視察を行う。
- 4) 現地の担当者よりご紹介いただいた海岸での子どもたちのための体験型企画に参加し、子どもたちの海での安全の見守りと、サモアの歌の披露を行う。
- 5) 学生間で上記の体験の共有と振り返りを行い、国を超えて実践できる災害看護の普遍的な原則と同時に、それぞれの文化にふさわしい災害看護の具体的方法を考察し、各自の学習課題と報告書をまとめる。さらに各所属大学で後日、演習の報告会を行う。

サモア国立大学および長野県看護大学間における交流事業 2013（平成25）年度学生短期交換留学 「国際看護実習」 履修生（実習生）およびスケジュール

「国際看護実習」履修生：長野県看護大学3名 およびサモア国立大学 2名 合計5名
引率教員：宮越幸代（「国際看護実習」科目担当）・今井家子・那須淳子 合計3名

履修生5名の概要

大学	氏名	学年
サモア国立大学看護健康科学部 National University of Samoa (NUS)	Mr. Tuiuli Tagaloa (ツイウリ・タガロア)	3 学年
	Ms. Emele Filisi (エメレ・フィリシ)	3 学年
長野県看護大学 Nagano College of Nursing (NCN)	伊東有紗子	4 学年
	飯嶋勇貴	4 学年
	宮澤江莉	編入 2 学年

国際看護実習 期間：2013（平成25）年7月29日（月）～8月10日（土）
うち 災害看護演習 8月7日（水）～8月10日（土）4日間

月日		午前	午後	夜間
0	7月27日 土	留学生サモア出国(日付変更線)		
		Auckland着 (乗り換え)		駒ヶ根到着
1	7月28日 日	休息	講座歓迎会	
2	7月29日 月	実習オリエンテーション・自己紹介	大学歓迎会・キャンパスツアー・宿舎オリエンテーション	
3	7月30日 火	施設実習①	実習カンファレンス	
4	7月31日 水	施設実習②	実習カンファレンス	
5	8月1日 木	休息	実習後カンファレンス	JICA駒ヶ根青年海外協力隊訓練所視察およびボランティアとの交流
6	8月2日 金	施設実習③	実習のまとめ・報告会準備	
7	8月3日 土	オープン・キャンパス参加(「国際看護実習」紹介および留学生との交流コーナー)		
8	8月4日 日	駒ヶ岳散策	休息	
9	8月5日 月	実習成果報告会準備	学内での実習成果報告会 災害看護講義・被災地での演習オリエンテーション	学生主催「夏祭り」参加 移動準備 等
10	8月6日 火	大学出発 →松本協立病院視察・卒業生との懇談	移動(松本→東京)	移動(池袋→釜石)車内泊
11	8月7日 水	釜石到着(小休憩)	保健師からの災害看護講話・意見交換	(釜石泊 1泊目)
12	8月8日 木	語り部の講話聴講・被災地の視察等(大槌町)	県立大槌病院視察・復興市場など	(釜石泊 2泊目)
13	8月9日 金	実習のまとめ・発表会準備 等	自由時間・休息	帰国準備(釜石泊 3泊目)
14	8月10日 土	釜石市子ども交流企画参加・ボランティア	関連機関挨拶・帰国準備など	移動(釜石→東京) 車内泊
15	8月11日 日	休憩・国際空港への移動・留学生帰国チェックイン		成田出発 サモア帰国

各自が設定した独自の実習目標と達成状況の振り返り

(長野県看護大学実習生の実習後レポートからの抜粋)

1. 各自の「国際看護実習」全体に対する独自の目標

★本学実習生 A

1. 病院や施設での実習を通して、サモアと日本における医療の違いを理解する。
2. サモアの人々が何に興味を示し、何に驚き、どう感じるかを学びたい。そして彼らをサポートしたい。

[根拠] 異なる文化的背景を持つ人々に対する看護を行う上で、具体的にどのようなことを配慮したり考慮するかを学び、実践に活かしたいと思ったため。

☆本学実習生 B

1. サモア人留学生の様子から文化の違いによる生活の困難さを知る。
2. お互いの看護観を共有し、違った視点に触れることで自分の視野を広げる。

[根拠] 日本に来て困ったことは文化の違いによるものが大きいと思い、そこからサモアの文化を知ろうと思ったため。視野を広げることでまた新たな自分に気付けると思ったため。

☺本学実習生 C

1. サモアの学生と看護に関する意見を交換する。
2. 文化的背景の違いを知る。
3. サモアの看護師と協力した活動について学ぶ。
4. 今後、自分が実習経験をどう活かせるかを考える。

[根拠] 国境を越えた関わりを行うためには、互いの文化的背景（生活習慣、考え方など）を知り、相手の国、自分の国の特徴を知ることによって互いの理解や協力ができると思ったため。また、医療の国際化が進む中、今後、自分にできることはなんなのか、どうしたら貢献できるかを考え、将来に活かしていきたいと思ったため。

2. 各自の実習目標の達成状況の振り返り

★本学実習生 A

・施設での実習やカンファレンスなどを通して、サモアと日本におけるケアの内容の違いや基準値の違い、道具の違い、展開方法の違いなどを学ぶことができた。そこには、文化的背景や歴史、経済面などの社会的背景など様々な側面が影響し合っているためである。

・サモアの人々に日本のチョコレート屋ドーナツを勧めても、あまり食べなかった。しかし、バナナにココナッツパウダーをかけた料理を食べると、とても嬉しそうな表情になった。また、サモアの民族衣装を着て踊る時も着付けの指導をしたり、髪を結うなど、積極的に行ってくれた。さらに、会話の中でサモア語を使ったり、サモアの歌を覚えようとしたことで、彼らとより親密になれたように思った。そのため、日本の文化を紹介して、気に入ってもらいたいというこちらの希望もあるが、それを押し付けず、相手の文化を理解して取り入れていくことで信頼関係が築きやすかったり、相手に受け入れてもらいやすくなる。

☆本学実習生 B

実習中だけでなく、一緒に買い物に行ったり遊びに行ったりした際にたくさん話をすることができた。やはり、困る場面が多かったのは食事であり、食文化の違いは人に大きなストレスを与えるということを知ることができた。看護観まではいかないが、サモア学生の人と関わる際の姿勢は見習わなくてはいけないと思うことがたくさんあり、人を尊敬するということがこういうことなのだなどと学ぶことができた。

●本学実習生 C

留学生の話聞くのに必死になってしまった場面もあったが、身振り手振りを交えながら患者の情報の共有や今後、どんな看護ケア、家族というものの考え、看護システムなどについて知ることができ、日本とは異なる文化、生活、価値観もあることを学んだ。看護過程や基本的な看護ケアの考えは日本・サモアと共通する部分もあり、何が共通しているか、異なっているかを知ることが大切だと感じ、共通する部分は積極的に連携を取りながら行っていくべきだと考えた。しかし、その際、言葉の壁があると連携、コミュニケーションが上手くいかない場合もあるのではないかと今回の実習を通して感じた。国際基準のもの、言葉を知っているとよりスムーズに連携や意識、考えの共有ができるように思い、英語である程度の会話ができれば最も良いが、図を用いたりして共通の理解をすることも言語が異なる人々とコミュニケーションをとる際には必要だと思った。今回、英語を用いての実習であり、ずっと英語には苦手意識があったが、英語ができるといろいろな国の人とコミュニケーションをとり、協力できること、また英語が話せなくてもジェスチャーを使ったりして伝えようとする姿勢が大切だということ、日本の価値観を押し付けないこと（入浴に関する考え）も大切だと感じたので、そのような経験を外国人、患者と関わる時に活かしたい。

3. この実習を将来に活かせる可能性について考えたこと

★本学実習生 A

外国人の方と接する際には、できるだけ相手の表情や言動・態度などに細かく注意を払ったり、積極的にコミュニケーションを図って、相手をよく理解しようと思った。また、相手の文化や考えを受け入れていくことで、協働していくことができ、お互いを信頼することもできると思った。初めは自信がなくともコミュニケーションを積極的にとっていきたいと思った。また、彼らとコミュニケーションを図ったり、言動などをよく見ることで彼らが受けるカルチャーショックや理解していなそうなことを把握して、そこに対して介入したり、興味をもったようであったり受け入れられたことについては、活用していくようにするなど、相手に合わせて配慮することも大切であると思った。逆に、相手の文化を理解し、相手の文化を受け入れる姿勢を示したり、こちらが配慮することで、相手も安心しやすかったり、親近感を抱きやすくなるため、相手の文化をよく知ろうと思った。

☆本学実習生 B

できないなりに英語を話し、コミュニケーションをとり続けたこの二週間は自分の中で大きな自信となった。何でも挑戦していくことが大切だと学んだため、積極的にいろいろなことに興味を持ち活動していきたい。

●本学実習生 C

現在の日本は国際化が進んでいるため、国内においても外国人看護師や外国人患者と関わる機会があると思う。その際には今回の経験を活かし、コミュニケーションを取ろうとする姿勢を持つこと、日本と外国では大小様々な文化、生活スタイル、価値観の違いがあることを念頭において関わることを大切にしたい。国際基準のもの（言葉、考え、スケール）を勉強していく必要性も感じた。また同じ日本人どうしであっても、先入観、偏見の目を持たないことも重要だと思った。「相手を理解する」ということは国際を問わず難しい問題なのかもしれないが、楽しいという気持ち、思いやりを持つという態度はどの国でも大切にされ共有できるものだと感じたので、思いやりを持って多くの人に関われるようになりたい。

4. 災害看護演習で感じたこと

★本学実習生 A

- ・地元の方の体験や、その体験を踏まえた意見・教訓を聞くことはとても重要である。地元の方の意見と政府やマスコミの報道にはギャップがあったり、現実や生の声ではない部分もある。「津波でんでんこ」「自然と対峙しなきゃならない」といった地元の方の言葉が印象的であった。また、訓練がとても大切であることをおっしゃっていた。そのため、災害に対して、自主的な訓練への参加や避難するための経路の確認・災害時の対応などを考えておいて、発災時に迅速に行動できるようにしておく必要がある。
- ・宝来館の女将の話から、子どもが被災後、遊ぶ場所がなくてストレスが溜まっているということを知った。子どもはいろいろなストレスを抱えたとき、遊びによって発散することもできるため遊びの支援も必要である。また、「釜石の奇跡」と呼ばれ、中学生が逃げたのに続いて小学生が逃げたということもあり、子どもの行動力や危険を感じる力は大人よりも強いのではないかと思った。また、防災センターに子どもを連れて行くことで、子どもが変わったということも話していた。そのため、子どもに行う防災教育は有効であるし、正しい指導をしなければ子どもを危険な目に遭わせかねないのだと思った。
- ・自主防災組織の活動によって、災害時に大きな助けとなり、多くの人々の身体・精神の身を守ることができたという話を聞き、そういった地元住民の力を借りることはとても重要である。保健師など地域住民との関わりが強い行政は、防災における地元住民との連携・協力体制を整えておくことが重要である。

☆本学実習生 B

今まで何気なく生活していることが多かったが、今ここで災害等起こったときにどのようなことができるか具体的に考えることができるようになった。しかし、チームワークの大切さを学び、自分だけ知っていてもしょうがないことを知った。そのため、もっと多くの人に知ってもらえるように自分の見てきたものを色々な人に話していきたい。また、女将さんのお話や大槌病院でのお話を色々な人に聞いてもらいたい。

●本学実習生 C

- ・地域住民・施設・行政・病院が連携した協力体制をつくり、周知する。
- ・災害時に何が必要になったかを被災地から学び、物品・知識（限られた物品での対処法、感染症対策方法、どんな疾患が増えているのか、どう情報を共有・保管するか）を備える。
- ・地域の特性を知り、その地域で予測される災害、被害、連携やその手段について考え、それにあった対策を考える。
- ・災害への意識を常に持ち、いつでも迅速な対応ができるように心掛ける。定期的に知識・設備の確認をする。
- ・風評などから被害者を差別しない。

5. 災害看護演習の経験を活かすために考えたこと

★本学実習生 A

災害において、自分の身を守ることの大変さ、難しさを改めて思った。いつ、どこで起こるか分からない災害に対し、防災や減災のための様々な研究がなされたり、情報提供されたり、訓練がなされている。しかし、今回の震災で被災した方々は多勢いる。そして、私自身この大きな災害が起こることを予想し得なかった。確かに災害に対する備えなど、ある程度知識はあった。しかし、原発や地域・病院での防災対策などに関しては、あまり知らなかった。今回の東日本大震災の後から、災害に関して、どうやって身を守るか、被災した時にどうやって周囲の人々と協力・協働しながら生活していくか、自分には何ができるか、平時から何をしておくべきか、といった防災意識が高まったように思えた。そして、災害時における看護職者の担う役割は大きいと思った。災害時における医療処置、医療が継続して受けられるようにするための援助、感染症・生活習慣病などの予防、精神的なケア、防災・減災のための訓練や防災組織との連携、他職種連携などである。このことから、改めて看護を振り返ると、看護はひとりで行うものであるが、やはり他職種や地元住民など、あらゆる人々と協力して、あらゆる人を巻き込みながら展開していくことも大切である。災害対策において、今回住民の方から、「自然と対峙してはならない」「人が造ったものは全て津波で壊された」という話を聞き、改めて自然に対する畏れの気持ちや、人間の無力さを知った。いろいろな方の話を、生の声を聞くことで伝わる思いもあるし、防災や日常の生活における意識も変わってくると思った。彼らの生の声を聞くことを躊躇してしまうこともあったが、インターネットの動画や記事などを活用して、いろいろな人の経験や思いを聞くことをこれからも大切にしていきたい。

◆本学実習生 B

自分は東北の被災状況を知ったつもりでいただけなのだ実感した。街の中心地であるはずなのに更地になり、何もない場所、プレハブでできたコンビニ、山の中にあるたくさんのシェルター。津波・地震からだいぶ経ったと勝手に思っていたけど、現在もまだ続いているということが理解できた。特に大槌病院でのお話や宝来館でのお話は、地震直後のことから現在、そして今後のことまでお話して下さったため、とても分かりやすかった。看護師としてではなく一社会人として何ができるか、考え直す機会となった。大槌病院の被災直後の話は、チームワークというものの大切さを改めて学ぶことができた。一人では決してできないし、周りとの声をかけ合い、協力していくことで患者さんの命を守ることができていた。三日間大変だったけれど、行うことができて本当に良かった。

●本学実習生 C

今までの授業では負傷者の処置方法や被災地に派遣された時の活動内容を中心に学んできたが、今回は被災者としての立場での考え、対応も学ぶことができた。プラムの里では災害時の備え（組織、研修、用具、地域や機関との連携）を行っていることを知り、住民の力を借りることは大きな力になるのだと感じた。医療者としても地域にどのような備えがあるかを知っておくことは、災害時の連携をスムーズにするために必要だと感じた。普段からの協力、連絡、指導が必要だと感じ、施設、住民、医療機関のつながり、組織づくりが大切だと学んだ。被災地での医療は、必要な物資が十分でない中で行う可能性が高く、ここでも他機関との連携の必要性を感じた。必要な物資の支援、患者の情報の共有、患者の移送などを行うこと、感染症やストレスなどによる疾患を予防することなど様々な対応が求められると思う。災害はいつ起こるか分からず、自分だけは助かるだろうと思いがちである。また生活圏以外の災害は時が経つと忘れてしまいがちである。しかし、災害を忘れることなく、教訓として備えたり、支援を続けたりすること、風評による差別を行わないこと、人としてできることから対応を行うことが大切なのではないかと思った。日頃から防災の意識を高め、教訓を生かすこと、共に協力し合う姿勢を保つことが必要だということ学んだ。また、地域の特性にあった対応（地形、住民の構成など）を行うことも必要だということ学んだ。

サモア国立大学留学生が学んだこと

Student Exchange Programme Assignment

(実習後レポートからの抜粋)

SUBJECT 1. *How did you feel about Japanese culture and custom?*

日本の文化や習慣をどうとらえたか

留学生 A さん

私は日本の文化、習慣、価値観、信念を楽しみながら学ぶことができました。まるでこの国に生まれた人のような気持ちで、「こんにちは」「いただきます」「ありがとうございます」などの言葉を学ぶことができ、緑茶や着物などもとても気に入りました。日本の文化を学んだり、日本とサモアの保健医療サービスを比較研究したりするために改めてこの国に留学しなおせたら、とさえ思うほどです。また日本人は、サモア人のようにとてもフレンドリーでその文化や言葉を分かち合うことに熱心であることもわかり、これは私にとってきっと忘れられない経験になると思います。

日本の医療ケアや看護は、人々のためによく組織化され筋の通ったものでした。保健医療施設は安全が考慮され、人々にとって最良の健康状態の維持がめざされていました。また、機材や備品は大変高品質で、国家の豊かさや政府による保健医療への支援がよく反映されていると感じました。私が感じた日本とサモアの保健医療看護の違いは、次の通り整理されます。

日本	サモア
<ul style="list-style-type: none"> ・使用物品や機材等の供給状態と品質の良さ 	<ul style="list-style-type: none"> ・使用物品や機材等の不足。入手可能なものだけが患者に使用される。最高品質のマネジメントのためには、よりよいケアを行うニュージーランドの実践が参考にされている。
<ul style="list-style-type: none"> ・看護師はよく教育され、訓練され、医師らとの間の意思疎通においても、礼儀正しく行われている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・看護師はよく訓練はされているが、医師との間に意思疎通の不足があることが問題である。両者の立場には葛藤があり、患者の要求を満たす最高レベルのサービスを実践するための能力にも限界がある。
<ul style="list-style-type: none"> ・(感染予防等のために) 整った設備と安全な方法、確立されかつ補強されたガイドラインがある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・膨大な対象の数に対応するには不十分で、交差感染などの弱みもある。ガイドラインや安全な方法があっても、人々はそれに準じなかったり、守れなかったりする。

留学生 B さん

日本の文化や習慣をサモアと比較するのは大変難しいことです。大変私的な感想ですが、日本の文化はとても興味深く、たとえば「外国人や訪問者を迎えるときの対応」「そういった人々と一緒に行動を共にしたり、お付き合いをする方法」「食べ物や料理を分かち合う方法」一特に外国人に対して食事を提供するときの方法などに関心を持ちました。文化という側面からのおもしろさというだけではなく、その形式がサモアとはまるで違うので、とても興味をもちました。私はこの短期交換留学という好機会に恵まれ、これらの文化を学ぶことができましたが、日本の文化はどれもとても面白く、「美しい」ものでした。サモアとは対照的に、日本の医療従事者はケアのために多様な設備や物品を扱い、病院ではそれらを使ってどの患者にもきちんとしたケアが行われていました。サモアにおける設備や物品の使用では、日本と似ているところもあるのですが、大きな違いは、日本は物品が豊富に供給されている一方、サモアではケアに用いられる物品は大変少ないということです。

SUBJECT 2. How did you think how Japanese medical care and nursing are utilized?
今後、活かしてみたい日本で学んだ医療や看護

留学生 A さん

日本で実践したり、見たりしたことを、自分が獲得した経験として有効に活用したいと思います。患者だけでなく、看護師にとってのベネフィット（便益）が考慮され、構築されている日本のシステムにおける知見を分かち合いたいです。たとえば、状態のあまり良くない患者について、病棟では朝の申し送りにメンバーが集合し、経過の情報共有と協議を行い、健康状態の改善のために尽くすというような実践です。

留学生 B さん

この実習経験を通して、私が将来、サモアでの正看護師としてのキャリアを向上させていくために多くの有益なことを学びました。日本の医療現場には、本当に興味深いことがたくさんあり、自分自身のケア・サービスをもっと向上させなくてはならないな、と思いました。たとえば「プラムの里」（複合高齢者施設）では、医療者は施設の中で、どの利用者にもよく意思疎通を図り、職員たちと協同的に働いていました。彼らは、入浴や身体運動などの他に与薬などの場面で、利用者それぞれにふさわしい固有のケアを実践していました。もっとも興味深かったのは、与薬時の「5R」の原則にのっとり皆さんがそれを順守しようとしていた点です。5R というのは、「正しい患者の、正しい場所に、正しい量を、正しい時間に、正しい方法で」という大原則ですが、患者も医療者も、安全性の確保のために、それらを反映していた点がとても印象的でした。

SUBJECT 3. How did you feel about Disaster Nursing in affected area in Tohoku?
東北被災地で災害看護について考えたこと

留学生 A さん

東北の津波被災地を訪ねて実習をしてみて、私は公衆衛生看護師になりたいと思い、それを決めました。なぜなら、私たち看護職の主な役割は、住民の安全に基づいた活動を企画・実践したり、健康認識を高めるようなプログラムを作成することにあると思ったからです。それで私は、自然災害に襲われたときに、どのように人々を助けるか、とう方法においての（今まで捉えていた技術とは）違った技術や、知識をもっと身に着けたいと思いました。（Aさんはサバイイ島という海岸に沿って公道が開けている島の出身）海沿いに暮らす人々のためのプログラムを通して、私自身も強い存在となることができるでしょう。私は、自分の島の海とともに暮らす村民や、友達、親戚の安全を導くガイドラインを確立するために、そのような知識や経験を豊富に備えた人々を巻き込みつつ、自分にできる活動を模索するつもりです。

留学生 B さん

日本で津波被災地を訪ねる機会をいただいたことにまず、感謝を申し上げます。私が最初に「津波被災地」と聞いてイメージしたのは、とにかく「すごい」場所だということです。そして、実際には私がこれからサモアに帰って、学ばなくてはならないことがたくさんある！という新たな認識です。だから、これからサモアに帰って、災害がいかに大きな災いをもたらし、国家を破壊してしまうかという影響の大きさを語りたいと思っています。そうすれば、村や集落の住民、地方や国家レベルでも人々は、災害に備えた万全な準備をし、災害からの影響を受けないための知識を持つことにつながると思います。また、避難プログラムは、万が一災害が起こった時の警戒や準備のための地域の取り組みを強化することになるでしょう。それだけではなく、常に災害が起こるかもしれない、という危機感を常に持っていることは、一人一人が持つ命はたった一つだけであり、その命が奪われてしまっただけで二度と戻ってはこないということを再度認識することになります。災害の際には、車や家などの所有物のことは忘れて、まず自分が助かることを優先するというのを忘れてはならないのです。

《平成 25 年度卒業研究》要約

2013 年度国際看護実習から学んだ 災害看護の普遍的な原則とサモアにおける災害看護の検討

長野県看護大学
氏名 伊東有紗子
指導教員 宮越幸代

日本においては 2011 年に「東日本大震災」、南大洋州のサモア独立国においては 2009 年に「サモア諸島沖地震津波」が発生し、近年の災害発生件数の増加やその被害規模の大きさから国際的に災害看護への期待は高まっている。本研究は長野県看護大学（NCN）とサモア国立大学（NUS）と学生交流に関する合意締結に基づいて開講された 2013 年度「国際看護実習」を通じて、被災を経験した両国の学生が獲得した災害看護の知見や、両国の学生等と共有できた学びを明らかにすることを目的とした。さらにこれらを踏まえ両国の普遍的な災害看護の原則を検討し、サモアの特徴を活かす災害看護の方法について具体的に検討した。

研究方法は NUS 学生 2 名（A,B 男女）に対し、記述式質問紙調査、半構造化インタビュー、意見交換、参加観察、実習終了後に提出されたレポートの分析を行った。分析はそれぞれの内容から「災害看護に関する知見」「災害看護に関する学び」「サモア独自の災害看護の方法」「普遍的な災害看護の原則」という 4 つの視点に基づいて行った。その結果、「災害看護に関する知見」では 9 項目、「災害看護に関する学び」では 2 項目、「サモア独自の災害看護の方法」では【災害に対する避難所・講習会場としての教会の有効性】【アイガを活用した自主防災組織】という 2 項目が挙げられ、さらにその項目の内容から、サモアと日本に共通すると考えられる「普遍的な災害看護の原則」を抽出した。

NUS 学生にとって、設備や備品などのサモアと日本では背景が異なる事柄からは「災害看護に関する知見」や「災害看護に関する学び」が明確には確認されなかった。一方、NUS 学生が自分自身の体験と結び付けて理解できた被災地での講話は「災害看護に関する学び」として具体的な発言の中で確認された。また「災害看護に関する学び」として導かれた【災害時に看護師が冷静になることの重要性】においては、「災害時に特有の反応である『正常性バイアス』は時に逃げ遅れの原因ともなりうる」という防災心理を踏まえることの重要性が導かれたが、今後の課題として、NUS 学生がそれを表面的でなく、実践的な学びとして理解するための方法や時間確保が必要と考えられた。同様に【津波からいち早く避難することの重要性】においては、現地で学んだ「津波てんでんこ」という教訓が、今回の震災で改めて見直された意味と現地の人々の体験を NUS 学生が十分に理解できる段階まで深める必要性が導かれた。

本研究は日本を訪ねた留学生を対象に、その経験や語り、観察された様子から彼らが得た知見や学びを分析したが、サモア現地の津波被害を正確に踏まえた分析は行っていないため、サモアの特徴を活かす災害看護の方法についての考察は推測に留まる。そのため今後は本研究を基にサモアの文化、慣習、地形、風土、医療状況等を考慮した現地での追跡調査を行い、本研究が導いたサモアにおける普遍的な災害看護の原則の妥当性や実用性を検討する必要がある。

* 研究内容は今後整理し、公表予定です。



サモア国立大学および長野県看護大学間における交流事業 学生短期交換留学「国際看護実習」の概要



1. 実施の経緯

- 1998年（平成10年） 長野県看護大学 Anne Davis 教授（現在、名誉教授）が友人を訪ね、南大洋州サモア独立国に学生有志とともに渡航。学生たちが医師不足の中で人々の健康を支えるサモアの看護師の活躍ぶりを見て、看護職の可能性の大きさを知る。また、同時に訪ねたサモア国立大学でも、日本との交流を期待するタイミングであった。
- 2001年（平成13年） 7月17日 両校間の相互協力協定に基づき、双方の学長が「サモア国立大学と長野県看護大学の学生交流事業に関する合意覚書」を交換する。
- 2004年（平成16年） 8月12日～28日 初回の学生短期交換留学「国際看護実習」が実施され、サモア国に本学より3名の学生が2週間の短期留学をする。
～現在 隔年度ごとに双方の大学に短期留学する形で実施（偶数年は本学からサモア国立大学に留学し、奇数年はサモア国立大学学生が本学に留学する）

2. 実習目標と内容

実習期間：留学先現地での2週間（14日間）を基本とする。

<p>サモア渡航年 （偶数年）</p> <p>本学より毎回4名 以内の学生が留学</p>	<p>開発途上国の暮らしと保健医療の現状を理解するとともに、サモア国立大学の学生との共同学習や現地看護者との協働を通して、サモアと日本の看護や保健医療の違いを対比し考察することで、双方の看護の特徴や看護の原則の普遍性を理解し、異文化的背景を持つ対象への看護や看護の国際的協働の基本となる力を養う。</p> <p>内容の例： サモア国立大学病院、地域保健サービス局の視察、地域病院、地域の看護師が運営する病院での実習および訪問看護実習、小学校等で看護職が担当する学校保健業務の視察および一部参加、双方の文化交流会、大学の授業視察および一部行事への参加、実習成果報告会 など</p>
<p>本学受入年 （奇数年）</p> <p>サモア国立大学より 毎回男女各1名の 合計2名が留学</p>	<p>サモア国立大学の学生と共同で日本の対象者を受け持ち、情報収集と問題点の抽出、ケアの実践を共同で行い、互いが持つ文化や社会的背景が対象理解や看護実践にもたらす影響を比較・考察する。さらに異文化的背景を持つ学生が異なる文化の国に滞在する際の対応を通して、彼らのニーズを理解すると同時に、自国の特徴的な文化・習慣に対する理解と表現力を高める。</p> <p>内容の例： 長野県内外の医療施設の視察（例：長野県立こども病院、松本協立病院、昭和伊南総合病院、聖路加国際病院 など）、老人保健施設での利用者受け持ち実習、乳児検診、母親教室、国際協力機構 JICA 駒ヶ根青年海外協力隊訓練所、高齢者デイケアセンターなどの視察・懇談会、大学の授業視察および一部行事への参加、実習成果報告会 など</p>

*これまでの実績を総合的に整理したものであり、実際には年度ごとに学生の要請等に沿って内容を決定している。

3. 実績：2004年度の開始以来、2014年度で10年の実績を重ねる。

実習生数（2013年度終了時）：本学に受け入れた留学生14名、渡航した本学学生11名 合計 25名

実習生が著した資料：実習で学んだ内容や成果について、2005年度は双方の学生が国際学会で共同発表した。

同じく2005年度と2010年度には、本学学生が内容や成果を本学紀要に執筆した（第7巻および第13巻）。

近年の受入年の実施状況

留学生の進路や希望等を考慮した実習内容を検討し、関心の広がりや能力の開拓につながることを期待、2005年度留学生の1名は卒業後、日本の看護系大学院（沖縄）に進学した。留学生の滞在中は、実習生以外の在校生も留学生と自由時間を共に楽しんだり、宿舎での生活全般をサポートし、「英語力にこだわらず、一緒に過ごす経験が大事」「国際看護が身近に感じられた」等の感想を寄せ、異文化的背景を持つ方々との共生を考えたり、日本の文化習慣を改めて見つめなおす経験となっている。また、実習での企画や視察先では毎回、複数の既卒国際看護実習生による協力があり、成果報告会には一般市民および他大学や近隣の学生、教員などの参加をいただき、本学への関心を高める機会ともなっている。さらに毎回の準備から実施まで、国際協力機構 JICA 青年海外協力隊駒ヶ根訓練所、青年海外協力隊サモア OB 会、在日サモア大使館によるご理解やご支援をいただき、2013年度の災害看護演習では、公益社団法人青年海外協力協会の多大なバックアップによって無事に終了した。

実習が終了し、卒業前に思うこと

飯嶋勇貴

卒業を迎えるにあたり東北での実習は僕にとって人生観を変える出来事となりました。景色や匂いそこに住む人たちの人柄。全てが大きな学びとなっています。本当にありがとうございました。

伊東有紗子

実習を終えて、国際看護実践における共同の困難さや、自分の無知に悩まされることも多かったが、災害看護に関してはサモアと日本の問題点や、両国の未開拓・未整備な部分の多さに気づくことができた。卒業後、この実習での経験をもとに自分の目で国際・災害看護に関する分野についてより多くのことを吸収し、学びたいと思った。自分の力不足を痛感するだけでなく、それ以上に看護は一人では決してできないことや、多角的な視点の重要性、看護の普遍的な原則などに関しても学ぶことができ、この新たに得られた経験をこの春の新たな旅立ちに活かしていきたい。

宮澤江莉

今回の実習で被災地を訪れ、津波の凄まじさ、被災状況のひどさを改めて感じた。災害の爪痕が残る場所がある一方、(処理されきれないがれきの上から草が生え、) 風化しつつある場所がある現状、住む場所を奪われたままの人がいる現状を目の当たりにし、一刻も早い復興が必要だと思った。ボランティアに行ったり、東北のものを買ったり、小さなことからでも行動に移し、(差別しないとか…) 地元に住み続け、そこで生きる希望をもって生活している人たちを応援すべきだと思いました。災害看護の視点では、医療者は住民、患者を守る立場にあると感じた。自分自身や自分の家族も大切にしながらそのような活動を行うのは大変だと思いますが、(←災害そのものから、病気から、感染症から、心の病からなど) どんなときでも冷静さを持ち、専門性を発揮することが役目であると思う。(そのためには、十分な知識、物品、連絡手段を備え、整えておくことが大事だと感じた。また、地域住民を知り、協力をすること、地域の特徴を知っておくことも医療者として、一住民として大切だと感じた。)(今回の釜石の奇跡でも、避難訓練が役に立っているし、組織をつくる手伝いや、さまざまな知識の普及を行うことが大事だと思った。)

東北では津波被害だったけど、長野県だったらどんな災害が起こりうるか。どんな備えが必要か。防災に関し、応用させていくことが大事だと思う。個人では、できるだけ日頃から意識するようにし、周りに目を配りながら生活していきたい。



国際看護実習を終えて

サモアからのエメレさん、ツイウリさんの二人を交えての国際看護実習、初めはぎこちなかった交流が、実習が終えるころにはまるで兄弟姉妹のように仲良くなっていました。3人とも2週間の間英語を使うことに慣れてちゃんと意思疎通ができるようになりました。2週間行動を共にする中で、さりげなく遠い国から来た二人への思いやり、気遣いをしていました。相手をわかろうとすること、自分で言えないことに気が付いてあげることが必要、そしてこれが異文化看護をする上でもとても重要だということに気が付いています。また、釜石での実習を通して5人が災害看護の重要性を理解してくれました。被災した方々の貴重な話から災害発生時に皆を落ち着かせる役割がある事、災害時だけでなく減災が重要だという事など、私が災害看護の中で伝えなかったことをたった4日間だけの実習から学んでいました。被災地を自分の目で見て、被災した方々の話を直接聞くことがとても重要なことだと改めて感じました。エメレさん・ツイウリさんもサモアでもこの体験を生かしたいと自分達の事としてとらえていました。この貴重な体験学習を今後の看護の中で生かしていってくれと信じています。

基礎看護学講座 教授 今井家子（災害看護担当）

震災から3年、現地では今や遅しと、今も復興への努力が続けられているにもかかわらず、いつの間にか自分はそのような現実と切り離された目前の世界だけを見るようになってしまっていた「後戻り」の感覚に、愕然としています。これから被災地に足を運ぶ際、「現地に行って何ができるのか」を考えすぎるのは、もうやめたいと考えます。＜自分には何もできない＞と思うのであれば、その自分が現地に対して「何もできない」、「理解しきれない」という感覚、いや「現地の暮らしを、人々の思いを『理解せねば』そして『理解できる』」などという、まずそんな自分の思い上がり向き合ってみることから始めるべきだったのです。自分が暮らす国以外の国や地域、人々の関わりも、あえて目を向けなければ知ることのない、考え方によっては知らなくても済む世界なのかもしれません。2014年度に10年目の節目を迎える国際看護実習は、学生のうちにそのような世界に少しでも目を向けてみる、自分の視点を少しでも広げてみるという点から、学生にもたらされた成果を具体的に公表する使命があると考えます。このたびは初めて被災地への訪問を組み込んだ災害看護演習を計画し、皆様のご理解の元に「みらい基金」からの多大な支援をいただきました。現時点で表現できることにはまだ限界があり、言葉も十分には尽くせていませんが、貴重なみらい基金を使わせていただきましたことに感謝を申し上げますとともに、この報告書がささやかながら改めて皆さんの心に働きかけることができたとしましたら、幸いです。

宮越幸代（国際看護実習担当）



学生短期交換留学「国際看護実習」の概要

1. 実施の経緯

- 1998年(平成10年) 長野県看護大学 Anne Davis 教授(現在、名誉教授)が友人を訪ね、南大洋州サモア独立国に学生有志とともに渡航。学生たちが医師不足の中で人々の健康を支えるサモアの看護師の活躍ぶりを見て、看護職の可能性の大きさを知る。また、同時に訪ねたサモア国立大学でも、日本との交流を期待するタイミングであった。
- 2001年(平成13年) 7月17日 両校間の相互協力協定に基づき、双方の学長が「サモア国立大学と長野県看護大学の学生交流事業に関する合意覚書」を交換する。
- 2004年(平成16年) 8月12日～28日 初回の学生短期交換留学「国際看護実習」が実施され、サモア国に本学より3名の学生が2週間の短期留学をする。
- ～現在 隔年度ごとに双方の大学に短期留学する形で実施(偶数年は本学からサモア国立大学に留学し、奇数年はサモア国立大学学生が本学に留学する)

2. 実習目標と内容

実習期間：留学先現地で2週間(14日間)を基本とする。

<p>サモア渡航年 (偶数年)</p> <p>本学より毎回4名 以内の学生が留学</p>	<p>開発途上国の暮らしと保健医療の現状を理解するとともに、サモア国立大学の学生との共同学習や現地看護者との協働を通して、サモアと日本の看護や保健医療の違いを対比し考察することで、双方の看護の特徴や看護の原則の普遍性を理解し、異文化的背景を持つ対象への看護や看護の国際的協働の基本となる力を養う。</p> <p>内容の例： サモア国立大学病院、地域保健サービス局の視察、地域病院、地域の看護師が運営する病院での実習および訪問看護実習、小学校等で看護職が担当する学校保健業務の視察および一部参加、双方の文化交流会、大学の授業視察および一部行事への参加、実習成果報告会 など</p>
<p>本学受入年 (奇数年)</p> <p>サモア国立大学より 毎回男女各1名の 合計2名が留学</p>	<p>・サモア国立大学の学生と共同で日本の対象者を受け持ち、情報収集と問題点の抽出、ケアの実践を共同で行い、互いが持つ文化や社会的背景が対象理解や看護実践にもたらす影響を比較・考察する。さらに異文化的背景を持つ学生が異なる文化の国に滞在する際の対応を通して、彼らのニーズを理解すると同時に、自国の特徴的な文化・習慣に対する理解と表現力を高める。</p> <p>内容の例： 長野県内外の医療施設の視察(例：長野県立こども病院、松本協立病院、昭和伊南総合病院、聖路加国際病院 など)、老人保健施設での利用者受け持ち実習、乳児検診、母親教室、国際協力機構 JICA 駒ヶ根青年海外協力隊訓練所、高齢者デイケアセンターなどの視察・懇談会、大学の授業視察および一部行事への参加、実習成果報告会 など</p>

*これまでの実績を総合的に整理したものであり、実際には年度ごとに学生の要請等に沿って内容を決定している。

3. 実績：2004年度の開始以来、2014年度で10年の実績を重ねる。

実習生数(2013年度終了時)：本学に受け入れた留学生14名、渡航した本学学生11名 合計 25名

実習生が著した資料：実習で学んだ内容や成果について、2005年度は双方の学生が国際学会で共同発表した。同じく2005年度と2010年度には、本学学生が内容や成果を本学紀要に執筆した(下記参照)。

小澤杏奈, 藤岡好美, 結城美穂, 田代麻里江：海外実習において看護学生が学んだサモアの文化と看護の特徴(資料), 長野県看護大学紀要第7巻, 2005年4月。

菊池郁希, 竹村麻紀, 宮澤奈津美, 宮越幸代：サモア国立大学留学生を迎えての2009年度国際看護実習—学生の視点で考えた実習の成果—(資料), 長野県看護大学紀要第13巻, 2011年3月。

4. 近年の受入年の実施状況

留学生の進路や希望等を考慮した実習内容を検討し、関心の広がりや能力の開拓につながることを期待、2005年度留学生の1名は卒業、日本の看護系大学院(沖縄)に進学した。留学生の滞在中は、実習生以外の在校生も留学生と自由時間を共に楽しんだり、宿舎での生活全般をサポートし、「英語力にこだわらず、一緒に過ごす経験が大事」「国際看護が身近に感じられた」等の感想を寄せ、異文化的背景を持つ方々との共生を考えたり、日本の文化習慣を改めて見つめなおす経験となっている。また、実習での企画や視察先では毎回、複数の既卒国際看護実習生による協力があり、成果報告会には一般市民および他大学や近隣の学生、教員などの参加をいただき、本学への関心を高める機会ともなっている。さらに毎回の準備から実施まで、国際協力機構 JICA 青年海外協力隊駒ヶ根訓練所、青年海外協力隊サモア OB 会、在日サモア大使館によるご理解やご支援をいただき、2013年度の災害看護演習では、公益社団法人青年海外協力協会の多大なバックアップによって無事に終了した。

実習が終了し、卒業前に思うこと

飯嶋勇貴

卒業を迎えるにあたり東北での実習は僕にとって人生観を変える出来事となりました。景色や匂いそこに住む人たちの人柄。全てが大きな学びとなっています。本当にありがとうございました。

伊東有紗子

実習を終えて、国際看護実践における共同の困難さや、自分の無知に悩まされることも多かったが、災害看護に関してはサモアと日本の問題点や、両国の未開拓・未整備な部分の多さに気づくことができた。卒業後、この実習での経験をもとに自分の目で国際・災害看護に関する分野についてより多くのことを吸収し、学びたいと思った。自分の力不足を痛感するだけでなく、それ以上に看護は一人では決してできないことや、多角的な視点の重要性、看護の普遍的な原則などに関しても学ぶことができ、この新たに得られた経験をこの春の新たな旅立ちに活かしていきたい。

宮澤江莉

今回の実習で被災地を訪れ、津波の凄まじさ、被災状況のひどさを改めて感じた。災害の爪痕が残る場所がある一方、(処理されきれないがれきの上から草が生え、) 風化しつつある場所がある現状、住む場所を奪われたままの人がいる現状を目の当たりにし、一刻も早い復興が必要だと思った。ボランティアに行ったり、東北のものを買ったり、小さなことからでも行動に移し、(差別しないとか…) 地元に住み続け、そこで生きる希望をもって生活している人たちを応援すべきだと思いました。災害看護の視点では、医療者は住民、患者を守る立場にあると感じた。自分自身や自分の家族も大切にしながらそのような活動を行うのは大変だと思いますが、(←災害そのものから、病気から、感染症から、心の病からなど) どんなときでも冷静さを持ち、専門性を発揮することが役目であると思う。(そのためには、十分な知識、物品、連絡手段を備え、整えておくことが大事だと感じた。また、地域住民を知り、協力をすること、地域の特徴を知っておくことも医療者として、一住民として大切だと感じた。)(今回の釜石の奇跡でも、避難訓練が役に立っているし、組織をつくる手伝いや、さまざまな知識の普及を行うことが大事だと思った。)

東北では津波被害だったけど、長野県だったらどんな災害が起こりうるか。どんな備えが必要か。防災に関し、応用させていくことが大事だと思う。個人では、できるだけ日頃から意識するようにし、周りに目を配りながら生活していきたい。





長野県看護大学学報

発行:長野県看護大学広報・交流委員会 〒399-4117 長野県駒ヶ根市赤穂1694 Tel 0265-81-5100
ホームページ (http://www.nagano-nurs.ac.jp/)

サモア国立大学に津波被災義捐金を贈呈



【サモア国立大学学長(男性)に義捐金贈呈の様子、右端はFulisia看護健康科学部長(2009年10月27日:現地時間)】

目次

■医療活動報告

サモア南方沖地震津波後の現地の状況と医療活動報告 ————— 御子柴裕子、宮越幸代 2

■教育実践活動報告

2009年度国際看護実習についての報告 ————— 宮越幸代 5

2009年度国際看護実習履修生の学びと感想 ————— 菊池郁希 6

竹村麻紀 7

宮澤奈津美 8

Seira Pea and Tua Totau Deno Russel 10

中国医科大学学生来学 ————— 喬 炎 11

卒研究生の全国学会での発表を指導して ————— 喬 炎、飛弾浩一、梁景岩 12

第39回 日本創傷治療学会で発表して ————— 阿部美智子、杉浦綾乃、藤森恵里、森脇有希 13

地域看護公開勉強会報告 ————— 松原智文 13

FD研修会報告 ————— 唐澤由美子 15

平成21年度長野県看護大学研究集会プログラム ————— 16

■OBだより

————— 金山裕子 17

————— Takako Jawor 17

■リレーエッセイ

「人を育てる」って? ————— 大脇百合子 20

『これまで』と『これから』 ————— 下村聡子 20

■同窓会からのお知らせ ————— 21

■事務局からのお知らせ ————— 21

■付属図書館通信 ————— 24

サモア南方沖地震津波後の現地の状況と医療活動報告

地域看護学・在宅看護学講座 御子柴 裕 子
国際看護学講座 宮 越 幸 代

2009年9月29日午前6時48分(現地時間)、サモア南方沖トンガ海溝で発生した地震により、サモア独立国(以下、「サモア」)は大津波による被害を受けました。地震の規模はマグニチュード8.3と過去200年の中で最も大きく、震源の深さは約18kmと浅く、さらに震源地はサモアから190km沖という近さであり、これらの悪条件が重なった結果、津波によって140名余の尊い命が奪われ、約5,000名が住居を失いました。

本学は2001年にサモア国立大学(以下、「NUS」)と大学間協定を結び、国際看護実習や研究等で相互に交流を深めてきた経緯があります。今回のサモアでの津波災害の一報を受け、深山学長以下本学の有志が中心となり、本学が果たすべき役割等を検討した結果、次の活動を決定しました。

1. 緊急援助募金を実施し、被災者救援義捐金として確実に現地に届ける。
2. 津波被災地の状況や住民のニーズを把握した上で、直接的な支援活動を行いながら、災害看護や災害看護教育の視点で今後の支援方策を検討する。

以上の活動を主な目的として、御子柴が10月25日から28日まで、宮越が11月7日までサモア現地を訪問することになりました。

1. 津波災害緊急援助募金(義捐金)

本学の有志が発起人となり、10月9日～16日に緊急援助募金を行いました。本学の教職員や学生はもとより、卒業生やその保護者、退職した教職員や講義や実習等でお世話になっている関係各所の皆様、合計99名と3団体のご厚意により、総額46万3,620円が集まりました。

募金は4,877アメリカドルに両替し、現地時間の10月27日、サモアの災害支援活動の責任者の一人である、NUSのProfessor Le'apai Tu'ua 'Ilaoa Asofou So'o学長に、義捐金として贈呈いたしました。学長は「多くの皆さんからの支援に大変感謝している。被災者のために使用させていただきたい」と述べられました。その後、サモア政府災害対策本部において、NUS学長より災害対策本部長に義捐金を手渡されました(表紙写真)。



廃墟と化した海辺のホテル

2. 津波被災地の視察と被災住民の状況

私たちは翌日にはNUSのご厚意により、ウポル島南東部の海岸地域の被災地(Lalomanu, Matareva, Poutasi等)を視察しました。この地域は、以前は海外から多くの観光客が訪れていた場所でしたが、ヤシの木は根こそぎ倒され海辺のホテルはほぼ全壊し、かつての風光明媚なビーチリゾートは瓦礫の山と化していました。海岸線に近い地域では、村自体が消滅してしまっところもありました。

そのような中、男性たちが協力して瓦礫を片付けたり家を建てたりしていました。住民の表情は明るく、私たちにも人懐こい笑顔を見せてくれており、サモア人の逞しさ、大らかさを感じましたが、廃墟に近い村で被災前の生活をどのように取り戻していくのか、大変不安が残りました。



山間地での新たな生活

Lefagaという山間部の高地では、集団避難・移住した人々が屋根と柱と床だけの簡易住宅(ファレ)を建てて、ビニールシートで雨風を凌ぐ生活の様子も見うけられました。「もう海岸沿いには住みたくない」と話していた住民もいましたが、海拔200m近い土地では水や食料の確保が難しいことに加えて、山間部ならではの病害虫の発生や近隣の集落との人間関係の構築等、環境の変化により様々な問題が予想されました。とりわけ水不足は深刻な問題であ

り、津波発生から1か月後の訪問時点でも、まだ住民は配給される水に頼る生活をしていました。

(本学教員、地域看護学・在宅看護学講座講師)

3. 津波発生後と現地を訪問後の情報収集

宮越は、訪問前に開催された「日本駐在サモア大使による緊急報告会」(笹川太平洋島嶼国基金主催)に参加し、被災後のサモアにおいては周辺各国からの救援により、人的・物的支援はすぐに充足されたことを把握していました。また、その前後の新聞報道による情報と併せて、被災後のインフラ支援の重要性は十分理解できましたが、「津波の規模に比べて被害は少なかった」と報道される半面、被災した住民の様子はあまり報道されておらず、大変気になっていました。その後、私たちが互いの公務を調整できたタイミングを見計らい、ようやく現地訪問が実現しました。この訪問にあたっては学内の皆様に様々な便宜を図っていただいたことを改めて感謝申し上げます。

現地到着後、NUS看護健康科学学部長の元を早速訪問したところ「被災地はほぼ片付いているので、やることはない」というお考えにより、被災地での支援活動について理解していただくには少々時間を要しました。また、保健省に赴いても正確な統計データを即座に得られず、サモア国で看護師として活動するための免許登録や被災地までの交通機関の確保(首都から被災地までは車で1時間程度かかる)などの約束事も日本の常識通りには進まず、実際に現地での医療活動に実際に参加できたのは帰国を目前にした3日間でした。

思うように動けない間は「ここは日本ではなく、サモアである」ということを肝に銘じつつ、新聞や雑誌などによる情報収集に努めました。交通機関の便宜を図って下さった地域病院の看護師長に同行する中では、サモア看護協会による「看護師免許の登録制度の見直し」に関する会議に参加することができました。この見直しの背景には「津波被害後に海外から多くの看護師が数日単位でやってきて看護業務に参加したが、看護師資格の確認ができず、現場が混乱した」という事情がありました。さらに、交通機関が確保できなかった日に飛び入りで参加したサモア赤十字社による救援活動では、日常生活用品の配給を手伝いながら住民に健康状態などを直接聞いて情報収集をしました。

ようやく訪問できた被災地の地域病院には元々医師が常駐しておらず、イギリスから来たボランティア医師が1名活動しているのを見かけたただけでした。まだ医師の養成が始まって間もないサモアの地方の診療所・病院は、通常、看護師だけで運営されています。診察室には、津波後に政府が発行した抗生剤使用のプロトコールが掲示されており、そこには「被災者は汚染した汚泥、砂、水を吸い込んでおり、ガラス片や木片、コンクリート片などによる創傷の感染部位に対しては積極的な切除術を推奨する」と書かれ、インド洋スマトラ沖地震津波が起こった際のタイ政府による疾病統計が根拠として引用されていました。

4. 現地で可能だった協力活動と被災した集落の状況

被災後、既に1か月を経過した現地の病院・診療所を拠点に協力できたことは、主に診療業務の補助でした。たとえば、そこでは医師がいないので、簡易な検査や薬品の処方も、糖尿病で潰瘍を形成した部分の切除・消毒・ガーゼ交換なども看護師の判断で次々に行っていました。看護師たちは朝8時に出勤すると、午後の2時、3時まで全く休憩もなしに外来患者や母子健診の対応を行っていました。目の前に巨大な水をたたえた海が広がっているにも関わらず、宿舎や診療所内の上下水道は破壊され、全く機能しないという現状の中で、疲れた様子も見せず笑顔で住民に接する姿は、まさに地域の保健医療を支える専門職者としてのプライドを感じさせるものでした。



建物ごと潮をかぶり、ストレッチャーや車椅子だけが遺されたPoutasi病院の跡地

そのような中でもPoutasi病院とFusi病院の看護師長を兼ねるJ氏は、空いた時間を見つけては被災した家屋や砂浜に案内してくれました。ほとんど廃墟となった集落には、マタイ(族長)と思われる老夫婦やごくわずかな家族が身を寄せ合うようにして暮らしていましたが、彼らもまた被災地の画像や映像の記録を撮るようにと何度も促すのでした。しかし、家の骨組み程度しか残っていない何もかも破

壊しつくされた大地に幾度も踏み込むこと自体が、無意識のうちにかかなりのストレスとなっていました。様々な家具や車がつぶれた状態で目の前に迫り、足元を見ればつい1か月前までに使われていたはずのお茶碗やお皿、衣類などがめっちゃめちゃに壊れ、引きちぎられて砂の間に顔を出しているのです。あるご家庭の庭にあったお墓には、ひっそりとトタンがかぶせられ、ささやかなお花と灯が供せられていました。またあるご家族からは母親が津波で子どもの手を離れたとたん、母子が離れ離れになり、後に子どもが木の枝に刺さったご遺体の状態で見つかったという話も聞きました。ふと視線を移すと、木切れで作られた十字架があちこちに覗いています。ココナツの木を見上げると、目線よりはるかに高い位置にガラスやトタンが刺さった傷跡が生々しく残されており、「まるで泥水の洗濯機に体ごと突っ込まれたような」というたとえを十二分に感じさせられるあり様でした。

5. 報告者がとらえた災害に対するサモア国の現状と今後の支援

現地では、津波が来る前の地震後から20分強の時間に対岸にある「首都アピアにも津波が来る」という誤報が専門機関から流され、アピア市内も警戒態勢になり最も被害を甚大に受けた南東岸への対応が遅れてしまった、という情報を得ました。ですので、駐日大使が「かつてのインド洋スマトラ沖地震津波時の教訓が活かされた」とは言いつつも、その反面、曖昧な情報に翻弄されやすい現状もあったことが推測されました。また、訪問中も軽微な地震が1日に何度かは続いて起こっており、住民は「地震後から普段よりも波が高い」と訴えていました。つまり、訪問時点ではまだ地震や津波が来る可能性は残っており、復興支援には現時点から可能な災害予防対策を含めることが不可欠だと考えられました。とはいえ、被災地は「片付いている」どころかインフラ整備もまったく進んでおらず、住民はそれぞれが選ぶ居住地をようやく確保し始めたところでした。また、障害者のケアや、被災後のトラウマ、理学療法などの必要性は指摘されていましたが、実際に地域で活動する看護職者は日常的な診療行為に追われ、それらを意識したりそれに取り組む余裕はないように見受けられました。つまり、まだ現地の人々自身が災害全期を踏まえた対策にはとりにかかれない状況であると考えられました。

このような現状に対する支援に思い悩む中、表敬訪問したJICAサモア事務所長からはサモア特有の文化に関連した具体的な助言をいただくことができました。たとえば、支援に際しては建物や何かの施設を提供するのではなく、住民らが自分たちの力でやれる力をつけること、また、防災や災害後のコミュニティや女性集団の自治力（トップダウン式）をうまく活用することです。それはまさに、「自助」、「住民参加」、「エンパワーメント（力をつける）」という国際保健医療協力をする上での原則でした。そこで、宮越が訪問時点で考えた支援は、①被災によって影響を受けた傷病者の在宅ケアの実態を把握し、在宅ケアの実施・継続に必要な介入を見いだす、②海岸沿いに残って生活を続ける住民の防災対策や被災後の心理的影響について把握し、住民主体で進められる対策を検討・推進する、③移住や同居によって生活環境を換えざるを得なかった住民の健康問題とその背景を中期・長期的に把握する、などの方法でした。また、NUS看護健康科学学部長からは、今回の被災地での経験や医療スタッフとのつながりを元に、「国際看護実習で災害看護を取り入れてみてはどうか」という進言がありました。

2週間足らずの滞在を終えて帰国した現在、思い返してみると、この日本という遠隔地からサモアに対して可能な支援はやはり、かなり限られると思われれます。また、宮越がここまで述べてきた考えは単なる独断であり、災害看護の専門家による助言や被災された方々の言葉に基づいたものではありません。しかし、今後、被災後の中期・長期的な問題が被災地に起こることは十分に予想されます。独りの力には限りがありますが、国を超え、看護者として教育者として限られた中でも可能な支援について、共に考えながら長期的に取り組んでみようという方と是非、協働できたら幸いと考えています。

このたびの訪問にあたっては、交通機関の確保や被災地医療機関への紹介、看護師登録手続き等について、NUSと現地の医療従事者の方々から多大な便宜を図っていただきました。私たちが無事に目的を果たし帰国できましたのも、国家的に甚大な被害を受けたにも関わらず、当方へのご協力を惜しみなくいただいたサモア現地の皆様のおかげです。この感謝の気持ちをいつか可能な形で還元すべく、国際的な協働に向けて日々取り組んで参りたいと存じます。皆様、本当にありがとうございました。

(本学教員、国際看護学講座准教授)